

しょう。基層の部分と現代の表層の部分がはっきり分別して見えることが多いということです。アラブ地域ならば、イスラム文化と言うならば、特色を地誌、歴史、宗教、文化を把握したうえで、それぞれに特徴があり、その特徴をある程度認識した上で、自分なりの閉じられた体系を作って、ものにしてゆく、産み出してゆく、そういうことが必要なのではないのでしょうか。

現代の中東問題を考えても地域研究の重要性は増しているものと思われまゝです。グローバル化が進行する今こそ我々に随分必要ではないのかと思います。その地域固有の文化や価値体系、思考法があるわけで、なにかの事態が発生すると、それを国際政治学や国際関係学などで横関係に分析されてしまう。世界全体が欧米の思考法、キリスト教に基づいた文化の否応無しの受容に至っています。各地域ならではの文化の底流、基本、固有の文化価値や民意のどれ程を踏まえたものなのか、大いに疑問とするところです。場違いかも知れませんが、私なりの結論を言っておきますと、イスラーム教はそれをベースに固有の文明を築きました。宗教が現実を律している故に、信心する者を例えば、六信五行の実践などで安心立命にしていたわけです。現象面では深層は把握できていないはずで、流行に流されて不易を消し去ってはなりません。知識が経験が生かされなくては社会は維持されません。衆愚的ソーシャルメディアが入り込んで盛んになる中で、物質的自己充足を求める風潮が若者を中心に増えてきました。宗教が求める、個人よりも社会のサラーム(安寧)のことを思いやりそのイスラーム(実践)を重んじた信仰共同体が揺らいでいます。魂の救済こそが貧しくても自己や社会の安穩を導くものだと思っています。外からは文明の衝突としてイスラーム世界が標的になり、独裁だ、貧困だの理由で崩壊させようとしています。イスラーム叩き、アラブ諸国の騒乱、これには周辺国に問題を起こさせ、目を転じさせる一方、国内ではパレスチナ人の人権を無視しているイスラエルの関与がどれ程か、ユダヤ系組織がどれだけ米欧やソーシャルメディア操作と関与しているか、私なりに疑っております。

まだ色々言いたいことはありますが、時間が超過しておりますので、これぐらいにしておきたいと思ひます。ありがとうございました。

*****質疑応答*****

(今松) 京都大学イスラーム地域研究センターの今松です。今日はお話ありがとうございました。お話を伺って、一つ一つの細かいことに対して何を知っているかというのが如何に大事かということがよく分かる講演だったと思ひます。

私も色々和昔のものを読むのですが、読んでいて分からないということがあります。分からないにも色々な分らないさがある、構文が分からないとか何を言っているのか分からないとかもありますが、どうしようもないと思ひのが、例えば一つ一つのものであるとか、あるいは生きているもの、習慣も含めてでしようが、そうしたものが出来た時にお手上げ状態ということが良くあります。先生は色々なことをご存じで、そういうことを説明するために一つ一つやってこられたと思うのですが、そういう際の苦勞や、どうすべきかというようなことで考えられたことがあればお聞かせ願ひたいと思ひます。

(堀内) 研究を続ける中で、色々和分からないことが出てくるのは、まったく私も同じです。対処法ですが、経験から和まして、二つ考えられます。

第一に、簡単な方から言いますと、時を待つ、少し時間を置いて、再びとりかかる。私はそういう時によく酒を喰らいますが。一種の異化反応を待つことです。

次にもう少し学者的な答えは、矢張り時の解決を待つことは同じですが、二つのある程度異なるテーマを並行して研究し続けることです。行き詰まったらもう一つの方に意を注ぐ。望ましいのは、その一つは自分に惹きつけられるテーマを、歴史研究者ならば(多分最も多人数だと思います)一つ何かモノとかコト、一つ何か形而下の物象研究を持つことです。困った時でも普通に続けられる時でもそうですが、同時並行して進めると、一方の方で手詰まりや行き詰まっていたら、もう一つ次元の違う領域をしばらく進めることです。専門でなくても、専門に関わる趣味でも良いのです。

私も経歴から見ても分かりますが、私は文学をやりたいかったのです。しかしともその才能がなく熟成するまで待とう、としました。キラア(『クルアーン』の読誦)をやっていて、自分で推考して脳内でまとめたこの研究内容だと読む側としてどれだけ理解されるんだろうと不審に陥りました。発想を深めて書きすすめることはいくらでもできます。アイデアを生かして理論化して文字化する。抽象化して書けることはいくらでもあるが、自分で納得ができないという状態に陥りました。この自分の納得いかない理由を考えました。それで思いついたというか、「モノに問う」領域を持ちたいと常々思っていて、資料的にラクダの関する民俗資料や語彙を集めておきました。それで少しずつ分類して行って、ラクダ研究に入ったわけです。するとたちまち関連領域として、砂漠に、遊牧民に、と間口が広がってしまったのです。それがストレートにアラブの求心的な面、基層文化の中心に入ってしまった、深みにはまるほどに多層な展開が観られ、発展に結びついた訳です。

モノやコトをとにかく一つやっておくと、抽象的なことではありませんので、そのものに問うことができる、納得ができる。そこには、己の好みが反映されるでしょうし、美観が養われるでしょう。さらには関連分野で意外な進展を見せる可能性があるわけです。歴史領域の分野でもモノだってあるわけでしょう。モノは物質的ですがコトとなるともう少し抽象的になります。そのコトを自分で何か見つけてやっておくと随分励みになります。何か抽象的な、形而上的なことをやっていると自分で自分を難しくしてしまう面があります。その領域が発展するかどうか、たとえ発展しなくても、その後の肥やしにはなっているはずではあります。

(所) 京都大学大学院の所と申します。大変興味深いお話をありがとうございました。レジュメの精神文化の所で、「天の信仰」「指極信仰」と書かれていますが、これはいったいどういうことを指すのかということをもう少し詳しく教えていただければと思います。

(堀内) 宗教と天体信仰のことです。やはり砂漠に戻りますが、地は無の砂漠、天は日月星辰の有の世界。昼と夜の対照的風土。アラビア半島の西側に三つの宗教が起きたことは、こうした環境及び人間への影響を考えないわけにはゆかないでしょう。

天の信仰と言った場合、昼の太陽と夜間の月と星です。これらを崇める信仰は古代オリエント時代からありました。ご存知のように星の代表は三神とされて崇められていました。月・太陽・金星です。男・女・子供、その形が基本です。アッラー(Allah)という言葉が生まれる前はアッラート(al-Lat)という女神が存在しました。そしてプレイスラム期に至るまでアッラート神も三神信仰の一つとして存在しました。イスラムはその天体信仰をも超越して、唯一神がそれらを太陽・月も含めて創造して役目を課すという信仰をもっていった訳です。

宗教は精神文化だというのはお分かりだと思いますが、アラブ世界にあっては、星は頼りにされ

ましたし、星に誓いましたし、星は部族神として信仰されました。部族名でもそれは明らかです。それには昼の太陽の圧倒する力、夜間のさんざめく星のまたたきが殆ど毎日見られた日常性を考えなければなりません。

日本でも天気が良ければ本当はもう少し星の信仰があったはずですが、「指極信仰」の説明に入りますが、わが国では北辰信仰があります。北極星信仰です。日蓮宗、天台宗には北辰信仰があります。これは玄武や亀蛇と係る妙見信仰に具現化され、個人的ご利益としては目を良くする信仰とされています。京都府だけに限っても、妙見を祭る寺社を巡礼する「妙見まわり」があるはずですが。北極星は時空の変化に関わらず常に動かない。天の軸、すなわちアラビア語のクトゥブなのです。これが軸となって、他の万物がその周囲を回る、私的信仰というより、広く天下国家の太平を願う教えです。北極星の軸に対して、北斗七星はその三垣さんえん——三つの垣と書きますが——の一番内側を守るとされています。こうした宿曜信仰は外来のもので、日本には中国から、そしてこれも最初はやはりインド起源ですから、オリエントや中東世界との相関伝播が考えられます。アラブ世界でも北極星はクトゥブ al-Qutb と呼ばれ、まさに天の軸とされ、北の方位を指し、何かに誓う時の誓い星ともされています。北斗七星は時節により方向を変えますし、夜間も七星の位置で方向と時刻を告げています。

指極信仰と言う点で、アラブ世界で特徴的なのは、北極星に加えて、南の方位星としてスハイル Suhayl があります。今日の話にもありましたようにカノプスのことで、大分南方にあり、わが国からは見えません。巨星で「秋告げ星」として遊牧民の間では、その出現と共に喜ばれ、歳時の指標ともなって敬愛されている星で、天体信仰と結びついています。私も二月、三月イエメンやオマーンに滞在する時、南に低く巨体を見せるスハイル星のまたたきの相図にその日の出来事を報せていました。

(所) そういった天体に対して、アラブの遊牧民は特にそうだと思うのですが、特別な意味を見いだしたりなどということは今でもされていることでしょうか。

(堀内) もちろんです。あの夜空には強烈な印象をだれにも残しますし、夜旅や夜間放牧では実用と申しますか、実生活の指標ともされているわけですから。今まとめているものですが、十二星座、それから二十八星宿と歳時との関わりを論究するものです。

現在の黄道12宮では、一か月間地軸の関係でずれていますが、今は2月、3月ですから水瓶座ですね。そういう星座に関して、さらには、黄道12宮、月の28宿、星座やシリウなどの巨星たち、遊牧民たちはイスラム暦に関係なく、「星の暦」を頼りにしたわけです。これらの星々を時節の指標として、それぞれに諺や言い方があります。サジュウという押韻散文を踏んでこの星がタラア (tala'a 東に昇つ) てきたら、ナウ (西没) したら、風の向きはこうなる。雲や雨などは気候だとかうなる、ラクダの生殖やジムウ (放牧給水周期) はどうなる、ナツメヤシの生育や果実の生長はどういう状態である、また旅に出る頃合いは、農事、牧事、商事そのようなことがちゃんと詠われています。遊牧民のことですから、元来は口頭伝承で伝えられていたものが、書かれて文字資料として残されています。

(二ツ山) 京都大学アジア・アフリカ地域研究科の二ツ山と申します。チュニジアで文化人類学的に植物観と申しますか、植物の意味をやっているんで、今日の先生の動植物の意味論の話は大変

興味深く、おもしろい話を聞かせていただきました。一点質問させていただきたいのは、私もチュニジアの事例でやっているとありますが、この何十年かの間にグローバル化や産業化などがあって、現地の人たちの間でも植物観であるとか動物観などが世代により、また、地方によっても変わってきている中で、そのような変わっていく意味ということをどのように捉えたらよいのか。堀内先生がこのように捉えているとか、捉えていくのが良いというようなことがあればご指導いただきたいと思います。

(堀内) 現地調査で直接体験して、それを資料として、まとめあげる作業、自分が知見したものを活かす、これは大事なことです。「学んで時に之を習う」と通じるものです。現地調査から学ぶということは、地域研究の独自性と係る事例研究とも位置付けられます。今では文化人類学という「変容」という用語も使えなくなってしまうほどに、現代化、グローバル化の波の中の飲み込まれて、伝統色・ローカル色を失ってしまっています。西洋中心の世界的な標準に合わせられ、アイデンティティは失われようとしています。どこに行っても表の世界が一様に覆ってしまっている。内なる世界・裏の世界はどうか、イーミックな観察、洞察が可能か、ということが問題になります。表層的には現象的には、流行のままに不易が見えないものとなってしまいます。

そこで聞き書きも含めた資料的な考察が必要となります。これは伝統の重要性と重なってきます。あなたの場合明らかにフォークの世界、民族植物学がかかえる問題と重なりますね。また地域研究の問題でもありましょう。その地域の独自性・伝統を知るということです。それは歴史とも関連しましょう。歴史の領域は政治史だけに限りません。文化史の開拓や拡充をして、捉えていかないといけません。先ほど述べたイスラムの六信五行の教義や儀礼だとて、一つずつ捉え直してゆけば、アラブの基層文化になっている遊牧民の伝統に結びついてゆくはずで、原点を把握してこそ、その発展形、現在の姿がみえるものです。表層的なもの、現象的なものの中に、透けて原型が見えてくるものです。だから研究対象の原像をあらゆる資料を用いて捉える必要があると思います。その前提に立てば、意外と透視が効くものですよ。私はラクダの諸相を探る中で、これはこういうことが元にあると納得してその経験値を積み重ねてきました。この文化要素はこの複合体に結びつけば理屈が叶うことになる、というような経験則です。一種の伝統の総体が透視出来るかなと思うときがあります。是非、横と縦の資料を渉猟して、根の深い研究をされることを望みます。そして地域研究の独自性の重要性を掘り下げて頂きたいです。

(今松) リズムの話をお伺いしたいと思います。アナトリアやバルカン半島などでは変拍子が非常にたくさんあります。例えば九拍子でも、3・3・3ではなく2・2・2・3などでリズムを作っていくダンスなどが非常に多いのですが、アラブではどうなのでしょう。ダンスや歌謡などに限らず、アラブのリズム感についてお話しいただければと思います。

(堀内) リズムを規則的な動きとしますと、基本的には3拍子、5拍子は作られたもの、人工的なものです。3拍子、5拍子が何故可能かといえば、詩歌や踊りを例に採れば、人工的という意味が明らかだと思います。ある一定の時間を限られた中で、無理なリズムを採るからこそ、可能なのです。換言しますと、人間も動物も二足歩行、四足歩行です。従って偶数リズムが自然なリズムなわけです。そこで、3拍子や5拍子といった人工的なリズムをずっと続けていたら、リズム行動自体に破綻を来します。2拍子か4拍子が恐らく我々の無意識の身体リズムとなっているはずで、だか

ら逆に、人工的に作られるリズムは時間制限を設ければ可能であるし、芸術・芸能分野は人工のものであって、こうして開拓・洗練されていったものでしょう。時間的に限りを設ければ、リズムはいくらでも作れます。

リズムは大別して、連続する動きに対して、ストレス・強弱をつける型と拍節をつける型とがあることになっています。アラブのリズムの基本は長拍と短拍を組み合わせる拍節型です。これが詩歌及び舞踊の基本となっています。アラブ詩の韻律法則から説明しますと、歩脚型は、4拍で4種、3拍で2種、5拍で2種となります。歩脚型は計8種となります。それぞれ短拍をどこへ持って行くかで、歩脚が異なることとなります。そうした歩脚型を単独の連続とするか、組み合わせて用いるわけです。したがって最も短いリズムは、3拍の歩脚型単独で作るものになりますし、最も長いものは5拍歩脚型二つを組み合わせた10拍となります。最も多いのは4拍歩脚型と5拍歩脚型とを組み合わせて9拍リズム連続するものとなります。詩ではこうした歩脚型を用いて16種の律格型・リズム型が作られています。歌や踊りもこうした詩の律格型に基づいてセットされ、独自の領域を発達させました。

私は韻文・詩の韻律、散文・サジュウの押韻法などで、その分野のリズム観も相当勉強しました。こうしたリズムの最古の形は、アラブの伝承ではラクダの歩調と結びつけられています。最古の歌であるフダーウ(キャラバンソング)に帰せられています。キャラバンのようなラクダ隊のハーディー(hādī 先導者)は彼らに語りかけ、歌い掛けて導いたとされます。そのリズムがラクダに、その内容が騎乗の同行者に興味を沸かせ、リズムを変えることによってラクダたちのペースを変えることが出来たといわれています。その原型がラジャズ調 *rajaz* だと言われております。ラジャズの本義は「ラクダの臀部・後ろ足の何らかの傷病」であります。そして、歩調においてもその患部の後脚の運びがスムーズではなく、負担をかばうように短く＝短拍になります。四肢の等拍である4拍子、タン・タン・タン・タンとなります。ストレス、強弱を置きませんから、拍節で区別せねばなりません。長拍は4個以上は続けられません。だから、どこかで必ず半拍を設けます。そこがおもしろいところで、歩脚型の不可欠なポイントです。最初の基本形がラジャズのタン・タン・タ・タンでした。半拍を前に移行するのがハザジュ *hazaj* でした。タ・タン・タン・タンの拍子になります。必ず、4拍の中の一つに半拍を置いて、それを核・ワティド(*watid* テント杭)とします。これがアラブの特徴です。こうしたリズム観もアラブはラクダに帰しているところに、人間と動物との深い関係・文化の諸相を読み取ることが出来るでしょう。今日の話はラクダに始まり、ラクダに終わることになりますか。

(小杉) 今日はどうもありがとうございました。